東アジア各国共同人材育成に関する課題

はじめに

私は大学において考古学を専攻しています。研究テーマは「東アジアにおける初期農耕社会・文化の比較研究」で、これまでに中国や韓国の多数の研究者と研究成果を共有してきました。こうした中で自ら培われました「東アジア世界」という観点を通して「人材育成」に関する考え方を述べさせていただきます。考古学という学問は歴史学が問題にするきめ細かな時間にはあまり拘泥しません。文献研究に基づく歴史学とは異なってその把握する時間幅は大きく、時には100年単位、200年単位で物事を考える習性がありますので、目前にせまった問題の解決には余り役にはたちません。しかし教育や人材育成といった長期間にわたる見通しをもって事に当たる必要のある折には、考古学者の考える時間単位内での発想法がそれと連結することが考えられますので、ここにこの問題に対する私見を披歴する次第です。

1．共通性への希求

今日の世界は、global standard の掛け声とともにアメリカを中心としての共通的世界あるいは普遍的世界を求める方向性が高まる一方、ECの拡大や自由貿易連合、イスラム世界の精神的統一性に見られるように、地域的なまとまりを求める動きが複雑に絡み合って、混沌とした状況を呈しています。前者は英語という表現法とコンピューターを手段としたアメリカの経済戦略に即発された側面が濃厚であるのに対して、後者はある程度の文化的伝統を共有する国々が地域共同体の団結といった集団統合により、アメリカに対抗しての地域的独自性を求める動きとも解されます。

ところで global standard の考え方の根底にあるのは、生物種としての現生人類（homo sapience sapience）の普遍性と人類文化の共通性を強く意識していることに注意を払わなくてはなりません。極端な例を挙げますと、一定の地域や集団の中で「典型的」と思われる小単位を取り出して調査を行い、その結果を統計処理して人類の行動様式の「法則（傾向性）」を把握して、人類全体に及ぼすことが可能であるとする考え方です。この根底には18世紀以来の西欧を頂点とする合目的的世界観が見え隠れし、非西欧社会に住む人間にとってはあまり愉快ではありません。こうした考え方はアメリカのヴェトナム戦争の敗北により否定されたかに見えましたが、エネルギーと食糧を梃子とした経済戦略、それを統括する情報社会の中で、またぞろ復活してきたと考えられます。このように見てきますと今日の世界情勢は、非西欧的人間にとっては人類史上第２回目の大航海時代に直面しているといっても過言ではありません。

15世紀から始まった大航海時代は、スペインから20世紀初頭のイギリスに至るまで、西欧を頂点とする機械文明社会の形成を招来してきましたが、その結果地球上のいたるところに西欧による植民地が形成され、その支配に組み込まれることで、西欧以外の人間の存在自体が否定

され、その単一の価値観を押し付けられることで、それぞれの地域固有の歴史的伝統や文化創造の面で大きな変質を余儀なくされるという事態を招くこととなりました。global standard の掛け声とともに、これと同様な現象が眼前で起こりつつあることを、今我々は凝視しなければなりません。

2．歴史展開の多様性

アメリカの人類学者 M. Freid は *The Evolution of Society.* 1967において、世界史の構造について注目すべき発言をしています。Freid によりますと、オリエントでひとたび世界最古の文明が形成されると、ヨーロッパやアフリカなどの僻遠の地は別にして、その周辺地域ではオリエントの高文明との政治的・社会的・経済的・文化的関係を抜きにしては歴史が語られない状況が生じることを指摘しています。オリエントの文明を受容するか、あるいはこれと敵対・対立するかは別にして、周辺地域ではつねにこれとの相関関係で歴史が展開することの指摘です。これと同様なことは東アジアでも考えることが可能です。東アジアでの最古の文明は中国の黄河地域で紀元前二千年紀に出現します。すると黄河文明の中心地とそれに隣接する地域では、これとは無関係には歴史の展開はありえなくなります。こうした状況は文明の高度化・広域化が進むにつれて、その影響を与える領域が拡大されることとなります。秦漢帝国が形成されますと、その周辺地域は中国に入朝し、新しい文物を入手するかたわら社会制度を模倣して古代文明社会に近づく努力をおこないます。オリエントにおいても同様で、オリエントを統一したアケメネス朝ペルシャはダリウス大王やクセルクセス２世のもとで古代国家としての社会制度を確立し、その影響を周辺地域に及ぼすようになります。これにより周辺地域の国々はペルシャに入朝し、大王に謁見し、その庇護のもとに歴史の歩みをたどるようになったことはペルセポリスの画像などによりにより容易に窺うことができます。こうした経過をたどりながら新しい文物や技術を受容することが一般的となります。古代文明が開化した隣接地では、それに倣い、あるいは独自に在来の文化との融合を図ることで文明への歩みをたどるようになります。

ところが周辺地域では高文明の影響を受けつつ、文化・社会が一定程度習熟を遂げますと、古代文明の中心地とは異なった歴史的展開を模索するようになります。中央集権国家に対する封建制社会の形成がそれにあたります。かつて日本封建社会制度が西欧のそれに類似していることを強調しての近代化論がとりざたされましたが、フリードのように文明の中心地域と周辺地域という対立軸でみると、オリエントとヨーロッパ、中国と日本という文明の中心地と周辺地域での相似的現象として良く理解できます。このことは現代社会のおかれている状況の解明に何らかの示唆をあたえてくれます。

このように16世紀以前の人類の歴史的世界は、オリエントと中国を二つの核として、中心とそれら周辺地域というかたちで形成されていったことが窺われます。16世紀以前においても内陸のシルクロードや航海によるセラミックロードなどでの東西交流は見受けられますが、根本的には二つの異なった歴史的世界がそれぞれ別個に展開したと見ることが可能です。

歴史的世界をこのように捉えることが可能ならば、中国、韓国、日本、それにベトナムは中国を中心とした一つの歴史的世界を共有していることが分かります。それらは社会制度としての律令制とそれを支える官僚制、共通言語としての漢字、礼制としての儒教、宗教としての仏教などを具体的指標として取上げることができます。南北朝から唐代までの東アジアの歴史はこうした社会が東アジアに通底していることが窺えます。しかし唐代の後半期以降、中世段階になりますと封建制と分権性の強弱にあわせて各国独自の歩みをすることとなり、その後西欧世界との接触を経ながら独自性をもった近代社会を向かえることとなります。

3．多様性への相互理解

このように一つの共通する東アジアの歴史的世界を一瞥した限りでも、求心性と離反性、共通性と異質性をあわせもった多様な歴史的伝統が窺えますし、文化的な営みにおいてはさらに複雑な地域的特色が生成されてきたことが窺えます。そこで人類史上の普遍性や共通性を追求する立場、地域的統一性を求める立場以外の、それと対極的な第3の道として地域的多様性を希求する立場があることが容認されるでしょう。

生態学的立場から今日の状況をみますと、現生人類の横暴、利益追求により多数の生物「種」の存在が不可能になっていることが差し迫った状況として捉えることができます。生物「種」の単純化の進行は、恐竜の滅亡を例にだすまでもなく、環境変化に対しては極めて脆弱であり、現生人類の存在自体が危機に晒されているといっても過言ではないでしょう。永年の風雪に耐えてきた野生種が今日見直されて、野生種の持つ生命力が高く評価されてきていることは、単純化・効能化を目指してきた我々が歴史の曲がり角に直面して、現代人にとって何が重要であるかを示唆するところが多いと思量されます。

このような考え方を推し進めてゆきますと、この度企画されている中国、韓国、日本による大学間の国際交流においても、永年のうちに培われてきた各国や各地域の歴史や文化に見られる「多様性」を相互にどのように理解し、容認するかといった観点がまず必要なことはたやすく認められることでしょう。日本の古代末に普及した「安珍清姫」の物語はもとをたどれば、中国江南地方の民話に行き着きます。またこれと同様な話は韓国にもみとめられますが、相互に著しく変容していることが窺えます。変容していること自体が問題なのではなく、何故変容したのかが重要な着眼点となります。東アジアという一つの歴史的世界において、共通性とともに、文化の多様性や異質性を探りその形成過程を明らかにすることで、本来的な相互理解が可能になります。東アジア世界に展開した多様な文化、多様な行動様式を相互に検討することで、お互いの位相を了解することから出発することが肝要でしょう。そのためには学生の大学間交流に先立って、あるいはこれと同時に3カ国の研究者が共通するテーマを基にして共同研究を推進してゆく過程で、多様性を認め合う研究者同士の相互の信頼感を醸成することが求められます。

こうして打ちたてられた相互の信頼感に基づいて、大学院生や学生の教育・研究にあたるこ

とではじめて、10年後、20年後を見据えた、global standard に代わる新しい価値観をもって世界を創造する有為な人材を育成することが期待さると思量されます。

2004年11月11－14日韓国東亜大学校「韓・日・中人材育成国際会議」での講演